HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	地域インターンシップって何だ？ ： 天売島の実践から振り返る
著者	大貝，健二；浜中，裕之；水野谷，武志；OGAI，Kenji；HAMANAKA，Hiroyuki；MIZUNOYA，Takeshi
引用	季刊北海学園大学経済論集，64(3)：29-51
発行日	2016-12-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《シンポジウム記録》

地域インターンシップって何だ？

── 天売島の実践から振り返る ──

大　貝　健　二・浜　中　裕　之[†]
水野谷　武　志

経済学部では，2017 年度から特別講義として「地域インターンシップ」を，翌 18 年度からは 2 年次開講科目として「地域インターンシップⅠ・Ⅱ」を開講予定である。同科目を開講する目的は，（1）時代的要請の変化，（2）学部カリキュラムとしての差別化，の 2 つが挙げられる。以下，簡単に説明しておきたい。

（1）時代的要請の変化についてであるが，政府は地方創生を掲げ，特に大学に関しては「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC＋）」等のプランを進め，地方公共団体や地元企業との連携を通じて，地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を実現させることを目的としている。地方創生の流れに身を任せるつもりはないが，地域経済の衰退・疲弊が著しい中で，地域経済の再生や活性化をどのように進めていくのか，ということについては考えていかなければならない点である。

（2）学部カリキュラムとしての差別化については，次の 3 点が念頭にある。第 1 に，本学経済学部では，2003 年に地域経済学科を創設し，同学科を中心に「地域研修」を毎年 20 ゼミ超，300 人以上の学生が参加する形で展開している。当初は，「地域」をフィールドにして現場から学ぶスタイルの科目は珍しかったものの，現在では，道内他大学においても数多く行われるようになっており，改めて方法論等も含め，質的に差別化する必要があると考えている。

第 2 に，質的に差別化する，ということに関して，地域と本質的なところで関わり合う必要があると考えている点である。研究，教育の両面において地域と関わり合うためには，信頼関係が重要である。この点において，大学が地域に対して「何かしてあげる」，「学ばせてもらう」，あるいは，地域が大学に対して「何かしてもらう」といった，一方通行なやりとりが散見される。しかし，そのような関係性は継続的なものではない。地域に入り込んで，地域の課題解決を目指した研究，教育を行うのであれば，大学と地域の双方における信頼関係を基にした，「支え合い」や「学びあい」が不可欠である。そのような関係性の構築に加え，比較的長期間，現地で生活しながら，生活者目線で物事を考えていき，課題を見つけ出し，それらを学問・研究と接続させることによって，質的に差別化したプログラムになりうると考えている。

第 3 に，多様な人材輩出へのチャレンジである。本学は，これまでに数多くの地域の発展に寄与する人材輩出に貢献してきた歴史がある。北海道経済を牽引する人材，地方公共団体職員の輩出はもとより，こうした本学卒業生による強靱な人的ネットワークが形成さ

[†] NPO 法人北海道エンブリッジ代表理事。

れている。それと同時に，私たちが考えているのは，北海道経済を牽引する担い手を輩出することと同様に，地域ベースで課題を発見し，解決に向けて邁進できる，地域経済再生の担い手を創り出すことであり，多方面に活躍できる人材を育成することが質的に差別化することにもつながると考えている。

以上の問題意識・関心から，2016 年度には，試行的に「地域インターンシップ」を羽幌町にある天売島を中心に 8 月 20-28 日で実施した。本稿は，その地域インターンシップの振り返りとして 2016 年 11 月 18 日に実施したシンポジウムの記録である。

1-1. 主旨説明（大貝健二）

それでは，シンポジウムを開催したいと思います。今日は，前にも掲げているように，「地域インターンシップってなんだ」というテーマでシンポジウムを行っていこうと考えています。地域インターンシップという言葉を初めて聞く人もいると思いますが，その導入の話をさせていただきます。本来ですね，元々今回の地域インターンシップを行う話は，ちょうど 1 年ぐらい前から経済学部の教員の中で出てきた話です。そのなかで，大学・学部として，学科の独自性をどう出していくかという議論の中で，「まずはやってみましょうか」と出てきた話です。私自身，地域経済学を専門にしていますが，その中で，なぜこのようなカリキュラムを導入していったのかという話になりますが，スライドにも示していますが，「いなかがおもしろい」と考えています。いま，日本国内では，地方創生がいわれ，地方自治体レベルでは，地方版総合戦略の策定が進んでいます。どうやって人口を維持するのかという話が出てきている一方で，いなかに対する注目も高まってきています。いなかは，周回遅れのトップランナーだと言われています。全国的に，先駆け的に課題が顕在化するのもいなかでした。東日本大震災以降は，田園回帰という形で都会からいなかに移住する人，U・I ターンで移動していく人が増えているといった動きもあります。

全国での様々な取り組みを見ると，いなかに仕事を作ってそこに若者を呼びこもうとする動きだとか，その一環として，今回掲げているような地域インターンシップという言葉が使われたりするようになってきています。実際にそういう取り組みをやっているところで，具体的に何をやっているのかというと，地域に入り込んでいって，そこで様々な挑戦を通じたインターンシップ，現場実践型のプログラムが行われていたりします。期間的には，大体 1 か月程度の長い期間で，現場で実践していくプログラムが出てきています。

大学で，全く同じスタイルで行うことがどこまで可能なのか常々考えていますが，「インターンシップ」という言葉を使いながら，就職活動とは無縁な，地域に入り込ませてもらって，地元の人と一緒に試行錯誤しながら考え実践するといったプログラムができないかということが，2016 年 1 月にシンポジウムで議論になり，「頭で考えるのも重要だけど，まずは実際にやってみたらどうだ」という結論になり，8 月に「地域インターンシップ」という形でやることになりました。そのほか，思惑としてはスライドにいろんなことを書いていますが，先ほども述べたように，経済学部の独自性をどう出すのかというところです。地域に関することは，今ではどこの大学でもやっているし，とりあえず単位をあげればいいような話もあるのですが，そうではなくて，いまの時代に本当に必要なことは何かというところをカリキュラム化して進めていきたいと考えています。地域のために「何かしてあげる」，あるいは地域から「何かしてもらう」というような関係ではなくて，お互いが手を取り合いながら，実際に地域をどうしてくのか，お互いに学びあい，成長し

あいながら取り組める仕組みづくりができないかということが本来の思惑です。

話は変わりますが，2016 年 8 月に，地域インターンシップを実施して，学生 6 名が天売島に行き，わずか 1 週間ですが現地で寝食をともにしながら，働きながら，頑張ってきた成果のお披露目が今日のシンポジウムのメインです。地域インターンシップを実施するにあたって，関わっていただいた方々に本日ご登壇頂きます。大学と現地のコーディネーター，天売島で大学生を受け入れてもらった方，参加学生と教員の 4 者ですね。それぞれの立場で，なぜインターンシップを実践しようとしたのか（教員），なぜその取り組みに協力したのか（コーディネーター），なぜ受け入れてくれたのか（受入側），なぜ参加しようとしたのか（学生），これら 4 つの「なぜ」をキーワードにしながら，シンポジウムを進めていきたいと思います。長丁場にはなりますが，最後までお付き合いいただければ幸いです。

次に，最初にご登壇いただく方々を紹介したいと思います。まずは，一般社団法人天売島おらが島活性化会議専務理事の坂本学さんです。続いて，NPO 法人北海道エンブリッジ代表理事の浜中裕之さんです。それから今回実際にインターンシップに参加した学生 6 名のうち 5 人が来ております。最後に，本学経済学部教員を代表して，水野谷先生に登壇していただきます。よろしくお願いします。

それでは早速プレゼン報告に移りたいと思います。最初に，「なぜインターンシップというもの実践しようとしたのか」ということで，水野谷先生から報告していただきたいと思います。よろしくお願いします。

1-2. 「地域インターンシップ」のねらい（水野谷武志）

みなさん，こんにちは。今，大貝先生からお話しがあった，大学側の「なぜ」という話は，大貝先生からほとんどお話ししていただきましたので，私は今配布したレジュメを基にして，スケジュールを紹介したあとに，少し大貝先生の補足をしたいと思います。「なぜ始めたのか」ということに加えて，全体として 2016 年 1 月から現在まで，具体的に動いてきた日程を皆さんにお伝えした方が，この後の話につながりやすいと考えています。

レジュメには，「試行版地域インターンシップの経過と実施スケジュール」と書いたのですが，これも先ほど大貝先生からお話しがあった通りです。経済学部で何かやってみたかったということです。2017 年度に 2 単位の科目として「地域インターンシップ」を特別講義として開講する方向で準備を進めています。準備といっても，いきなりやれるものでもないので，まずは試行的にということで，この間，坂本さん，浜中さん，学生の多大な協力のもとで，8 月に実施することができました。

大貝先生の話に付け加えれば，このようなフィールド型の科目は，「地域研修」として，経済学部では既に設置してあります。少し，歴史的な話になりますが，学園大では，昔は経済学部と経営学部は一緒でした。経済学部の中に経済学科と経営学科がありました。それが 2003 年に経済学部と経営学部と分かれました。経済学部の中に学科が二つ出来て，経済学科と地域経済学科というのが出来ました。それがもう 13 年前ですね。その時に地域経済学科では，地域に入り込んで，地域の人からいろいろなことを学ぶことを通して，机上の勉強と合わせた「学びの場」ということで，地域研修を科目として設置しました。基本的に，ゼミ単位で活動して，夏休みにゼミ合宿という形で調査を行っています。自分でいうのも何かおこがましいのですが，凄くてですね，学部のゼミの先生方の専門に合わせて，北海道内外，いろんなところで調査研

究活動をしています。それを毎年行っています。最近では，大貝先生もそうですが，道内に限る必要はないので，高知県や沖縄県とか，全国で展開しています。ただ，やっぱり多いのは，１泊２日や２泊３日とかそれくらい短期間です。学んできたことを，来週の地域研修報告会で報告して，成果をみんなで共有するという流れになっています。とてもバラエティーに富んでいていいのですが，先ほど大貝先生も言った通り，長期間で地域に入って見えるものというのは，多分２泊３日のものとは全然変わってくるという話で，そういう比較的長期で地域に入り込める取り組みを，経済学部としてできないかということもあって，今回地域インターンシップという科目をたてるべく準備・試行的に実施したという経緯です。

それで，一応そのスケジュールについてざっと説明したいのですが，先ほども話にあったように，2016 年１月にシンポジウムを行いまして，そこからまずは学生を募集しました。当然，今回は試行的ですから，単位はありません。だから本当にもう，いや今回応募してくれた人には頭があがらないのですが，単位はない，しかもお金がかかる，そういうことも募集要項には明記して，それでも応募してくれる人はぜひ来てくださいと応募したところ，学生６人が参加してくれたということです。天売島に行った時期というのは，８月の 20 日から 26 日の６泊７日です。その前日にオリエンテーションを実施して，浜中さんにも来ていただきました。地域インターンシップとは何かという話をしてもらったうえで現地に入りました。天売島での６泊７日間では，大貝，水野谷，西村，浅妻の４人が交替で滞在するという形にして学生を見守っていました。この辺の話は，学生から詳しい報告があると思うので，そちらに譲りたいと思います。そのあとに，札幌の羊ヶ丘展望台で夏休みイベントがあり，その一つに「ウニ祭り」を開催するということがあったので，そちらにも学生は参加してお手伝いをするということも，地域インターンシップの一環として組み込みました。一応それで地域インターンシップは終わったのですが，そのあとは，10 月 15 日に浜中さん主催の「インターンシップから考える地域と若者の未来」というセミナーで報告させ，11 月 18 日が今日のシンポで，来週，地域研修報告会があって，今後の予定としては，３月に現地に戻って，現地の人に向けた成果報告会をやれたらいいなと考えています。

あと同じ３月ですが，来年度から新しく科目になるので，そこに参加してくれる学生を募集するなどの作業が出てきます。もしこの会場で興味ある方は是非応募していただきたいなと思っています。簡単ですけども，私からは以上です。ありがとうございました。

1-3. 天売島の概要と「天売島おらが島活性化会議」の取り組み（坂本学）

（１）天売島の概要

天売島から参りました，一般社団法人天売島おらが島活性化会議の坂本と申します。よろしくお願いします。まず，天売島とはどういった島か知ってもらうために，10 月 30 日に天売島焼尻島のプロモーションビデオができましたので，それを流したいと思います。

（プロモーションビデオの上映）

ありがとうございました。再度天売島はどういった島かを大まかに説明したいと思います。まず，北海道の北西部にある羽幌町に属していまして，羽幌本町から西に 30 キロ，日本海に浮かぶ周囲が 12 キロの小さな島です。人口は 2016 年 11 月現在で 323 人です。アクセスは，札幌から高速バスが出ていまして，札幌から３時間ほどで羽幌に着きまして，後はフェリー，高速船でそれぞれ１時間，１

時間半で到着します。夏の間だと，東京から早ければ6時間くらいで島まで到着できます。先ほどのPVにもありましたが，島の東側が居住地域になっています。島の西側は8種100万羽の海鳥が繁殖する，世界でもまれな人と海鳥が共生する島として有名です。そのなかでも，オロロン鳥が絶滅危惧種です。保護活動の甲斐もありまして，現在は35羽の生息が確認されています。天売島の基幹産業は，周りが海で囲まれておりますので，漁業になります。

（2）おらが島活性化会議の取り組み

次に，私たち一般社団法人おらが島活性化会議とはどういった組織なのかといった話をしたいと思います。まず，離島活性化の先進事例である島根県隠岐諸島にある海士町に視察に行きました。この海士町ですが，こちらも廃止の危機にある高校を，何とか存続させようということで「高校魅力化プロジェクト」を行って，見事に高校の存続，さらには島の活性化に成功した町です。そこに島の有志が視察に行ったあと，海士町のように高校の存続，島の活性化を目指して一般社団法人を立ち上げました。当初の目的は，雇用の場の確保，創出です。高校生を島外から受け入れても，高校は定時制なので，昼間は働いて夜学校に通うというスタイルになります。そういった「雇用の場」をなんとかしなければならないということで立ち上げました。

現在，理事が3名，社員が6名，有給の職員が3名，そのうちIターン者が1名，島の高校生が1名，島にお嫁さんとして嫁いできた方が1名という形です。理事，社員の9名については，運送業や漁業，漁協職員と本職があるので無報酬で活動しています。

2014年度から，一般社団法人を立ち上げまして，スライドには主な活動内容を記載しております。まず島にはキャンプ場がありませんでしたので，キャンプ場の新規開設と運営を行っています。次に，天売島産の海産物を使用した商品開発をしています。株式会社CPSという会社があるのですが，札幌の丸井今井と旭川のフィール旭川内でヴィヴル・アンサンブルという惣菜店を経営しています。そこと連携して，天売島のタコを使ったお惣菜を毎日並べてもらっています。次に，羽幌町から観光案内所の窓口業務を受託しています。それから，もっと外に天売島をアピールしなければならないということで，羽幌の甘エビ祭りや札幌オータムフェストにも出店しています。同年に，札幌羊ヶ丘展望台さんからぜひ天売島のウニ祭りを単独開催してもらえないかという話がありまして，ウニ祭りを初めて単独開催しました。

次に福島キッズについてですが，福島で被災した子供たち30数名を2泊3日，天売島に受け入れて思いっきり遊ばせるという事業も行いました。その他，島内の清掃ボランティアだったり，住宅の受託ボランティアを行っております。

次に2015年度，天売高校とコラボ商品ですが，もともとありましたウニ缶を「天高（てんこう）ウニ缶」として製造販売しました。そのほか，町の方から仕事が次々ときまして，フットパスや黒崎海岸の草刈り業務，天売猫の捕獲事業等の受託を行っています。この年には，先ほどPVにもありました，シーカヤックやウニ採り体験，星空観察など，羽幌町のモニター事業の委託を受けて，全面的に「おらが島」でやっています。ボランティア的なものでは，町道の草刈りや焼尻綿羊祭りのサポートといったボランティア活動も行っております。

2016年度ですが，シーカヤックでまわるゴメ岬という，すごいきれいなところがあるのですが，そこに流れ着いたゴミなどが溜まって，景観的によろしくないところがありまして，クラウドファンディングを活用して，島民の皆様とゴメ岬の清掃プロジェクトを行

いました。あと天売島にはたくさんの木がありますが，間伐材の利用がうまくいってないということで，間伐材を使った炭作りや薪づくりを行う，森林整備等活用プロジェクトを立ち上げております。

また，こちらも問題になっております，天売島の野良猫の捕獲を行いまして，島民にも理解を得るために，天売の猫譲渡会，こちら旭川とか札幌でも頻繁にやっているんですけど，これ天売島でやろうということで，こちらも主催して，天売島でも開催しました。羽幌町の新規事業として提灯ナイトウォークの開催こちらも全面的に「おらが島」でやっております。「しまっちんぐ 2016」というのは，島と各企業を結んでですね，何かを起こそうという，先日私が行ってきまして，何とかこれから天売島がよくなるためのプロジェクトを仕組んできました。以上が主な活動内容になります。

（3）今後の課題，可能性

天売島とおらが島活性化会議，これからどういった形にしていかなければならないのかということについては問題が多々あります。まずは体験メニューの魅力化です。シーカヤックだったり，星空体験をもっと魅力のあるものにしなければならない。それからキャンプ場の快適化です。トイレはありますが，入浴施設はないとか，少し不便なところにあるとか，そういった課題がありますので，こちらも快適化を進めていこうと思っています。

次に，島民総動員の島ガイドの養成です。先ほど言いましたように，島民 323 人しかいませんので，たとえば，観光で訪れたお客さんにみんながそれぞれなにか聞かれたら，少しでも答えられる，それぞれあいさつできる，そういった島民の島ガイドを養成できればと思っております。それに付随して，地域食堂の「しゃべり場」創設したいです。

第 3 に，インターンシップや企業研修の受け入れです。やはり島の中にいろんな人が来てもらわなければ当然，島の活性化につながっていかないので，こういったことも積極的に受け入れていきます。それから，どこの離島もそうなのですが，漁業者の担い手不足の解消，観光産業の活性化がこれからの大きな課題になってきます。

そんななかですね，学生を天売島にインターンシップとして受け入れたわけですが，先ほども言いましたように，まずは島を知ってもらうことが大事で，そのためにはまず島に来てもらわなければなりません。よく天売島には何もないとか，そういった言い方をする方がいるのですが，何もなかったのではなくて，何も知ろうとしなかったのではないかと，私どもの思いがあります。若い方々が来ていただいたときに，感じたそのままの情報を発信していただければ，それに島民が気付いて，これからどうにかしなければならないということにつながっていくんじゃないかという思いで皆さんを引き受けました。

正直インターンシップがどういうものか，受け入れるこちら側もほとんどわかりませんでしたが，今回受け入れてみて，当然島民の方からも喜ばれましたし，これが次年度，さらなる将来的につながっていければと天売島を代表していえることだと思います。以上で終わらせていただきます。

1-4. コーディネーターの考えるインターンシップのあり方（浜中裕之）

みなさんこんにちは。NPO 法人北海道エンブリッジの代表理事を務めております浜中と申します。私は，北海学園大学の経済学部を 2008 年に卒業しました。大学 2 年生のころから，札幌でインターンシップを広げる活動をずっとやっていました。ここのキャンパスに通いながら，色んな企業を訪問して，「この会社面白いな」とか「この社長さん素

敵だな」という人を見つけては，他の学生たちに，こういう企業あるから行ってみなよという「紹介・マッチング」とをやっていました。そして，その活動が面白くなってきてしまったため，４年の時に，これでなんとか食べていけないだろうかということを思って，大学４年の時にNPOを設立しました。19歳の頃からそういうことをやり始めて，11年から12年ずっとやってきています。

私の報告では，大きく３つお話したいと思っています。１つ目は，自己紹介，学生時代どういうことやっていたのかについて，１月のシンポジウムでも話したことですが，簡単にお伝えしたいと思います。２つ目は，エンブリッジの取り組みについてです。我々が思う教育効果の高いインターンシップというのはどういうことなのかということを，今回の天売島での取り組みに対しての狙いも含めて，お伝えをしたいと思います。最後に３つ目は，これは情報共有・情報提供にとどまるのですが，天売島インターンシップがどのような経緯でスタートしていったのかをお伝えしたいと思います。

（１）浜中氏の学生時代

まず，私は，1985年に留萌市に生まれました。おばあちゃんとおじいちゃんが羽幌町に住んでいまして，天売島とか焼尻島は私にとっては身近な存在でした。行ったことはなかったのですが，いつか行ってみたい場所だったということも今回の背景としてはあります。

2004年に北海学園大学に入学しました。１年生の時は，ひたすら遊んでいる大学生でした。テニスサークルに入っていて，それなりに楽しかったのですが，やはり，大学２年や３年になると，「将来どうなりたい」ということを周りから色々聞かれるようになりました。自分が社会に出てから活躍しているイメージが全然湧きませんでした。２年生の時に，私のゼミの先生が地域経済学科で，色々な企業さんと繋がりがある先生だったこともあり，「先生このままじゃまずい気がするのですが，何かないですか？」と尋ねた時に，たまたま先生の知り合いで，広告代理店を経営されている若手の社長さんと知り合いました。その人との出会いがきっかけで，２年生の後半から学校に通いながら，その人の広告の会社に行き，会社が終わったら学校に行くという生活をするようになりました。その会社がベンチャー企業でしたので，やれるならどんどんやれと言って，営業をやってみろとか，企画やってみろとか，自分でお客さん担当しろというように，どんどん任せてくれるようになりました。そのため，私も楽しくなり，多い時だと，20件から30件くらい自分でクライアントを抱えるようになりました。授業中にクレームの電話かかってきて，授業が終わったらお客さんのところに謝りに行くとか，仕事は楽しいことだとか，自分でもこんなことができるんだというような，沢山の発見がありました。

このようなこともあり，何もできない若者に対して，「とりあえずやってみろ」と言って任せてくれる社長はすごいなと思い，きっと自分のように，そういうことやりたい学生はもっといるはずだし，そういう学生を受け入れもていいよと言ってくれる企業も，もっといるはずだと思い，３年生に上がってからは，インターンシップのコーディネートを始めました。まずは，ひたすら札幌を中心に，年間250社から300社くらい，毎日色々な企業に２件くらいアポイントを入れて，色々な企業を回っては，こんな事業があるのかという発見をしつつ，魅力的な社長を見つけてはインターンシップの交渉をして，「いいよ」が出たら学生を送り出すということをやっていました。最初は，私がインターンしていた企業の中の事業部として立ち上げたのですが，残念ながらその会社は，私が４年生の時に潰

れてしまい，１人独立するということになり，４年生の時に NPO を作って，今ずっとやってきています。

「実践的な経験」というか，アルバイトだと，やはりここまでがアルバイトの仕事だとか，それ以上はバイトの子はやらなくていいとか決まっていたりするので，リアルに社会を経験できる，そういう場がもっと札幌や北海道に増えていって，学生のうちに，多くを経験して様々な思いや可能性を持って社会にでていくということが，もう少し当たり前になるといいなという思いを持ち続けています。そのため，大学を卒業してから，ずっと実践的なインターンシップを北海道に広げていこうと活動してきています。

（２）北海道エンブリッジの活動概要

次に，北海道エンブリッジで今やっていることを簡単にお伝えしていきたいのですが，まずは，経営者の方をお招きして，学生とディスカッションをしています。例えば，セイコーマートの丸谷社長や，元 JT の古田社長とか，そういう方に業界の裏側を聞こうというようなことをしています。あとは，道内の大学からの依頼をもらい，企業を巡るバスツアーを担当したり，５つの大学と連携しながら，夏休みの実践型のインターンシップを，「SUMMER JOB FESTA」という形で行っています。これは，毎年 12, 3 社の企業さんと，40-50 人の学生をマッチングするもので，文科省の事業でやらせていただいています。そのほか，夏は農業のプロジェクトをしたり，ベトナムでインターンシップをしたいという大学の要望で，ベトナムに行って企業を開拓してきて，学生 10 人くらいを連れて，現地の学生も一緒に企業を回るということもやっています。そういうことをしながら，大学とか，企業とか，行政とか，あと，OB や OG とか色々な人たちの繋がりのなかで，大学生が大学で学びながら，地域に出て，実践して，経験を学問として捉えなおすという繰り返しができるような，地域コミュニティやコミュニティ共有のようなものを作っていこうとしているのが我々の今の活動です。

そのなかで，今 10 年くらいインターンシップをやってきて，効果が高くて，かつ継続していけるインターンシップはこういうことではないのか，ということをお話ししていきたいと思います。簡単に言うと，「学生だけが学べるインターンシップは続かない」ということです。やはり，それだと企業さんは疲れてしまうので，１年２年くらいだったら OK と言ってくれるのですが，３年目くらいから，「ちょっと忙しくてね」って言われてしまいます。やはり相手にとっても，価値が生まれるとか，来てもらってプラスになるというような，お互いにとってメリットがないと，いい意味で継続していかないと思っています。

（３）学生に求められる「社会人基礎力」

社長さんとお会いした時に，「大学生にどのようなスキルを求めますか」ということをよく聞くのですが，企業としては「社会人基礎力」を在学中に身につけてほしいとよく言われます。この社会人基礎力とは何かというと，大きく３つの力に分けられています。一つ目は，前に踏み出す力です。自分で開拓できる，道を切り拓ける力です。二つ目は，何か問題や課題に直面したときに，どうすれば解決できるのだろうとか，要は考え抜くことができる力です。三つ目が，チームの仲間たちでその課題を解決していく，チームで価値を生み出していく力です。この３つの力が必要だと言われています。

逆にいうと，インターンシップ通じて，この３つの力が身につくようなプログラムになっているかどうかが大事だということで，ただ受身で行って学ぶものではなく，取り組む中で自分が考え抜く構図があるとか，チー

ムで人の力を借りてやらなければならないとか，そういうことがプログラム中に埋め込まれていることが，インターンシップとしては必要なのだと思っています。

今，北海道で広がっているインターンシップは，大きく３つの形に分けられると思います。１つは，見るとか知る，１泊２日や２泊３日といった比較的短いインターンシップです。２つ目は，夏休み１か月２か月という期間で体験するものです。３つ目は，エンブリッジでは中心的に取り組んでいる，半年とかそれ以上の長い時間をかけて，成果を出すところまでやろうという，「実践型インターンシップ」ですが，この３つ目のスタイルが広がって来ていると言えます。今回の天売島さんと一緒にやらせていただいたのは，見学型と体験型の中間であり，それぞれのいいところを取って２週間ぐらいで，がちっとやれるモデルを作りましょうというのが，今年度の取り組みだったのではないかと振り返って思います。

私たちとしては，しっかりとプロジェクトを作ることを大切にして運営をしていました。地域や企業としては，「こういうプロジェクトを実現したい」とか，「こういう島を実現していきたい」という思いに対して，大学生が「一緒にやりたいですね」というように，仲間の関係をしっかりと作って取り組んでいくことで，学生たちにとっては学びになるとか，地域にとってはこの解決したいプロジェクトに向けて，半歩でも一歩でも前に進むことが理想です。このようなプロジェクトを実現していくことが，先ほどの社会人基礎力なども含めて，インターンシップを通じて身につけられるものになるのではないかと思って取り組んでいます。

（４）プロジェクト設計の重要性

あとは，大きくこういうことを大事に設計してきたという話ですが，１つ目は，３者でプログラムの目的がちゃんと共有されているかということです。今回で言えば，大学とエンブリッジでの共有が１つ。それから，「おらが島」さんがやりたいと考えている目的が１つ。あとは，学生たちが，このプロジェクトになぜ参加したのかという目的をお互いがしっかりとわかっていることが必要かと思います。そのうえで，学生も地域も企業も，「一定の覚悟を持って飛び込む」ということが大事だと思います。しっかりと現場を持って，目的意識・課題を持って，①現地の人たちの声がより近くで聞けるということ，②自分が超えなければいけないハードルが設定されているということ，③取り組む中で，学生と企業さんでの目標の確認や振り返りができるかどうか，④それらを私たちエンブリッジがつないでいく，それらのことが可能なプロジェクトであれば，エンブリッジとしても是非やりたいと思っていて，色々なところにアプローチをしていたところ，これらの全てをクリアできたのがおらが島さんでした。学生たちには伝えてきたのですが，「自分のためにするのはやめましょう」，言い換えれば，自分の学びとか，自分が経験したいことを中心に置くことはやめましょうと言ってきました。自分にとってどうかというのは，いわば「消費者」として物事を捉えているので，インターンシップの意味があまりないからです。自分が生み出す側，生産者側にまわって，どうやったら島の人の役に立てるのか，どうやったら一緒に活動してくれる人に求められるのかということを試行錯誤する，生産者の視点に切り替えて，２週間取り組んでいくということ，小さくても人の役に立つ体験ができると，質の高いインターンシップになっていくのではないかということで，そういう環境が，散りばめられているようなところを実現したいと思って探していたというのがインターンシップの目的になります。

最後に，天売島さんとおらが島さんとの経

緯をお伝えしたいと思います。最初のシンポジウムで話が始まり，その後，たまたま２月か３月に当別町でシンポジウムがあって，私がエンブリッジの話をして，もう１人が天売高校の魅力開発プロジェクトの担当をしている方でした。終了後にそのことを学園大の先生方に話したところ，天売島は面白いかもしれないねということになりました。最初は，私の方からひたすら候補地をリストアップして，片っ端から電話をかけていきました。留萌市とかあと羽幌町とか，天売島や焼尻島といったキーワードが出てくる諸団体含め上から順に電話をかけていくなかで，おらが島の坂本さんから，まだしっかりと説明もしてないのに「良いですよ」という返事をいただきました。

その後，６月上旬に先生がたと主旨説明をしに天売島に行って，天売高校を見学したり，おらが島さんとお話をしたり，ゲストハウスなどの宿泊できる場所あるかということを確認してきました。戻ってきてから，できそうな内容，課題になりそうなことを抽出しながら，プロジェクトを設計していき，インターンがスタートする１週間前ぐらいに，もう１度大貝先生と私の２人で天売島に行って打ち合わせして，プログラムが完成しました。完成と言っても，未知な部分が多くて，本当にエラーがあった時の対処は，坂本さんにお願いした状態でした。4－5割ぐらいは見通せるけども，あと半分は蓋を開けてみないとわからない形でした。

（5）取り組みの成果・可能性・今後の課題

ここからは学生たちに話をしてもらおうと思いますが，８月 22 日から１週間という形でスタートして，私と先生方で，なにかあった時に対応をするという形で，常に島には誰かがいました。結果，特に問題は起こらなかったのですが，私たちはずっと遠くで見守っているという形で，インターンシップを終了するということができました。

そして，先ほどお伝えした４つの項目が本当に，どれも体現できたプロジェクトだったのではないかと思っています。あとは，インターン場所が島であることが，大きく利点として作用したのではないかと思っています。その理由の１つ目として，逃げ場がないことです。札幌でインターンシップを行うと，「辛いからやめます」とか，「もう明日から行きません」ということがあるのですが，天売島は海に囲まれているので，逃げられない。そのことは行く前にわかっているので，しっかりと腹を括れて，一定の覚悟を持って取り組むことが出来たのではないかと思ってみていました。

２つ目は，生活とその経済・産業の結びつきがすごく近くにありました。例えば，札幌でいうと，蛇口ひねれば水が出るのは当たり前だったりとか，トイレは流したら流れるというのは当たり前ですが，島だったら「どうやって水を確保しているのですか？」とか，「どうやって下水って処理されているのですか？」とか，「子供生まれたらどうするのですか？」とか，インフラと実際の生活の重要性が身近に感じられるわけです。「ある物が欲しい」と思っても，すぐ手に入るわけではないので，誰かに船に積んで持ってきてもらって，それを自分たちが買って使うという，大都市にいると分業化されて見えてこないものが，島の中にいると，１つの経済環境として把握することができる。これは，学生たちにとっては大きかったのではないかと思います。３つ目は，１番とも似ているのですが，島に滞在して１週間過ごすということの意味です。札幌あたりで行うと，インターン後には帰宅します。すると，インターン自体が日常生活の多くの情報があるうちの１つにしかすぎないのですが，住み込みでやっていると，朝起きたらもうインターンがスタートしていて，寝る時にインターンが終わって，１日す

べてがインターンになる，濃密なインターンシップができるというのは，とても大きかったと思います。また，１週間１つのことをひたすら考えていく，そういう集中力が見える場になったのではないかと思っています。

今後のテーマとしては，来年度以降，今日参加した学生たちにも是非参加してもらいたいと思っていますが，より長期化していくためにどうするか，というのは，今先生たちと議論しているところです。８月に訪問した時は，繁忙期の最後の方でした。１番の繁忙期は６月から８月中旬なので，そのあたりの時期で大学の講義等がありながら関わらせていただくためにはどうすればいいのか，が課題です。あとは，12 月など，閑散期にどう関わることができるのかということも，長期化をしていくうえではテーマの１つと思っています。

２つ目は，成果をより可視化していくということで，例えば札幌で何か商品を売ってみようとか，商品開発をしてみようとか，さっきカフェとかそういう情報共有できる場所が必要という話もあったと思いますが，自分たちで，カフェを作ってみようとか，商品開発してみようというようなプロジェクトが出来て，天売島の〇〇は自分が作ったんだというようになってくると，より厚みのあるものになっていくのではないかと思っています。

1-5. 地域インターンシップ活動報告（中谷侑樹，木村拓貴，天野伸吾，松原巧実，白幡優作，谷口明華里）

（１）インターンシップへの参加理由

これから８月 20 から 28 日に天売島で行われた地域インターンシップの報告会をさせていただきます。天売島へは学生６名で行きました。今日は，３年生の中谷君が欠席しているため，２年生５人が報告します。

「なぜ天売島に行こうと思ったのか」ということですが，「同じ経済学部の仲間と島で共同生活することに魅力を感じて」（天野伸吾：中囿ゼミ２年），「ごく単純に，島での生活ってどういうものなのだろう，ただそれだけ」（松原巧実：宇土ゼミ），「９月には地域研修があるが，比較的時間がある８月になにかできることがあればいいなと思って」（谷口明華里：大貝ゼミ），「ただ授業にでて，バイトして帰宅する大学生活だけだともったいないと思っていたこと，ゼミの先生からも話があり，どんなものなのか興味があった」（木村拓貴：大貝ゼミ），「僕先生から面白いことやるよって言われていたことと，座学だけの大学生活は飽きていたこともあって，せっかくだから参加してみようかなと思って」（白幡優作：大貝ゼミ），「大学生活で得られないような経験をしたい，自分に何ができるのかを試したい」（中谷侑樹：浅妻ゼミ）と，それぞれが何かしら目的や関心を持っていたことになります。

（２）島での１週間について

次に，天売島での生活について紹介して行きたいと思います。

当日のスケジュールは，８月 19 日に顔合わせ，浜中さんからのレクチャーと懇親会の後，20-21 日で羊ヶ丘展望台での「ウニ祭り」のお手伝いをしてから天売島に渡る予定でした。しかし，海が時化ていたことから，ウニが捕れず，「ウニ祭り」が一週間先延ばしになりました。そこで，顔合わせの翌日に，早速島に渡るというドタバタな感じでインターンシップが始まりました。

19 日の顔合わせでは，参加学生にしてみれば，学生同士，先生方，浜中さん，坂本さんみんなが初対面でした。ですので，知らない先生もいるし，本当に明日から島に渡るということが実感できないままに，身支度をしました。明日から天売島での生活なのに，食べ物やお店とかはあるのか，寝る場所は大丈

夫なのか，といった情報も何もなくて，何を持っていけばいいのか本当にわからず，懇親会が終わった後，前日の夜 10 時とか 11 時にお店に行って，とりあえず食料を買い込んだりしました。各自がそれぞれ買い込んだ結果，大量のお米，カレーのルー，インスタント食品を持参することになりました（写真１）。

翌日から島に渡り，まず宿泊場所になるゲストハウスに荷物を置きました。その後，６人でレンタルサイクルにまたがって，２時間程度で島を１周したほか，夜はみんなでカレーを作って美味しくいただきました（写真２）。

２日目から，具体的に島でのお仕事が始まりました。それぞれグループに分かれて観光案内所の手伝い，お店をたたんだ木下商店の片付けのほか，イベントで使用するウニの選別とウニ剥きを行いました（写真３）。また，写真にはないのですが，販売用としてタコを実際に捕まえて，それをさばいたりもしました。そのほか，堆肥の箱詰めも行いました。

３日目は，観光案内所のお手伝い，木下商店の片付け，ウニむきを行ったことは２日目と同様ですが，新たに加わった仕事は，朝３時からの「魚を網から外す仕事のお手伝い」です。また夜には，「おらが島活性化会議」の皆さんと懇親会がありました。

朝３時から魚を網から外す仕事は，奈良漁業部さんのところで行いました。メンバーのうち３人が担当しました。朝３時から開始だったので，２時 40 分には起きて行かなければならなかったのですが，こんなに朝早くに起きることは普段はないので，とても眠かったですが，一生懸命頑張りました。

夜の懇親会では，島に滞在していた浅妻先生も加わって，おらが島の皆さんと懇親会でした。島の方々から，叱咤激励を受けながら，楽しい懇親会でした。

４日目は，木下商店の片付けのほかに，最終日に島で行うイベントの話し合いがメインでした。また，天売島は星空が綺麗だったので，夜は外に出て星空を眺めていたら，木下商店の伊藤さんに遭遇し，観音崎まで車で連れて行ってもらいました。とにかく満天の星を見たのは初めてで，今でも鮮明に記憶に残っています。

写真１　大量に買い込んだ食料

写真２　レンタサイクルで島内１周

写真３　ウニ剥きの様子

5日目ですが，メンバーの3人が奈良漁業部さんのところで朝3時から網から魚を外す作業の手伝いに行きました。そのほか，ペンキ塗りの依頼があったので2名がペンキ塗りに行くことになりました。

一通りの仕事が終わった後は，6日目に，交流会（イベント）開催の機会をもらったので，島民の方に知ってもらいたいということで，みんなでチラシを作成し，300枚位印刷して，一軒ずつ直接手渡しで配ってきました。夜は年に1度開催される町政懇談会や，スポーツ交流会の方にもお邪魔させていただきました。

6日目ですが，交流会の内容に関しては，後ほど詳しく説明させていただきます。そして，7日目（最終日）ですが，交流会も終わって，もう帰るだけという状態でした。ゲストハウスの掃除等を終わらせた後，島でお世話になった方々に挨拶してまわりました。船から最後お世話になった方々がフェリーターミナルの方に集まってきてくれて，またサプライズも用意してくれていて本当に嬉しかったです。

（3）交流会について

それでは，交流会について紹介していきたいと思います。私たちは島にお世話になったことへの感謝を表すものとして，交流会を開催することにしました。もともと，島に着いた1日目から，どういうものにしたいかという話はしていて，内容も考えていたのですが，当初は縁日のような企画だとか，食事を提供できたらいいというイメージでした。

そのときの私たちは，島の人たちが必要としているのは，こういうものだろうと誰にも相談せずにイメージばかりを膨らませていました。今振り返って考えると，頭でっかちな大きなイベントだったという印象があります。それと同時に，本音を言えば，「何をやればいいのか」が全く分かりませんでした。何も分からないなかで，島民が本当に喜ぶことってなにか，どうすれば感謝の気持ちを伝えられるのか，というところで悩んでいました。

その時に，坂本さんから次のようにアドバイスを受けました。「分からないと思ったことは，きちんと島の人に相談すること」，「交流会で，本当に自分達が大切にしたいことは何かということ」，「お世話になった方々に，どうやって感謝を伝えるのか，その方法をもっと考えてみるといい」ということでした。このアドバイスを基にたどり着いた結論は，お世話になったり，仕事をくれた島の人たちともっと話をしたいということや，仕事だけでは関われなかった人たちとも関わりたいということ，そして，「自分達の声」でしっかりと感謝を伝えたいということでした。そこで，島民と学生でゆっくりと会話できる空間があるイベントに決めました。それに加えて，島の方々にもお世話になりながら，島の人が大好きな焼き鳥を販売することにしました。

多くの人に来てももらうために，手作りのチラシを，一軒ずつ手渡しで配りました。また，島には連絡用のIP電話があり，IP電話を通じてイベントの告知もしました。

イベント当日は，多くの人に来てもらいました。学生は，それぞれが島の人のテーブルに入り，「島が楽しかったです」という話は当然のこと，多くの方と交流をもつことができました（写真4）。

写真4　イベントの風景

平日に交流会を行ったのですが，それにも関わらず，たくさんの島の人に来てもらい，焼き鳥も約 800 本提供することができました。また，島の老人ホームにも事前に訪問していて，焼き鳥が欲しいという方にも持っていきました。

（4）羊ヶ丘展望台ウニ祭り

8 月 27-28 日に羊ヶ丘展望台で行われた「ウニ祭り」についてお話しします。当初は，ウニ丼や殻付きウニの炭火焼きも提供する予定だったのですが，結局 1 週間ずらしてもウニ漁ができず，ウニ丼と殻付きの焼きウニは提供できませんでした。しかし，ウニ汁などで，私たちが剥いたウニが使われていて，自分達が加工したものを提供することができたこと，それを美味しいと言ってくれたお客さんがいて，とても嬉しかったです。外ではホタテやイカも提供していました。あとは，展望台で写真を撮っている観光客の方に，天売島の魅力などもお話したりもしました。

（5）今後の関わり方について

最後に，今後についての話をさせていただきます。私達 6 人は一週間で島でのインターンの生活を通して，天売島がとても好きになりました。その理由として，ただの観光客としてではなく，インターン生として仕事や交流会で島民の方々と話せたことがとても大きかったように感じます。観光客としてではない濃密な時間を過ごすことができたので，島に対しての思いをもつことができたし，島の人たちと一緒に，島の課題を見つめられる存在になりうると感じました。

札幌に帰ってきてからは，天売島の外から，島を応援する応援団になりうると感じました。私たちが望むこととして，天売島を応援する人が，これからもどんどん増えていったらいいなということがあります。今の一年生や来年の一年生などを中心に，たくさんの人を天売島につなげていけたらいいなと考えています。

天売島と私たち学生と関係は，まだまだ始まったばかりです。今回シンポジウムに来てくださった方のなかに，来年度以降の新しい応援隊がいればいいなと思います。

2. ディスカッション

大貝：それでは後半に入りたいと思います。とても多くの質問を出していただいてありがとうございます。質問の内容見ると多方面に話が及んでいますので，次のような形で進めたいと思います。

最初は先ほど行って頂いた，プレゼンテーションに関する具体的な質問を，報告者に答えてもらいます。その後は，「地域インターンシップ」関する，抽象度の高い質問を基に，ディスカッションしていきたいと思います。まずは，坂本さんに対する質問です。

島民の方が，若い人たちに向けて天売島の魅力を伝えるために，行っている具体的なアクションはありますか，主に外部に向けてと言う意味ですね。

坂本：今まで島民の人が，直接的にイベントに参加してだとか，SNS で発信するということは一切有りませんでした。そういった中でおらが島活性化会議が生まれたという経緯があります。それによってやっと外部に対して情報発信するということが出来てきたように思います。先ほどの写真にもありましたように，漁師の若い子たちなどもかかわって，一緒に協力するようになって，少しずつですがイベントなどにも参加して，情報発信するようになっています。まさに今，現在進行形で進めています。

大貝：次の質問です。報告の中にもありましたが，「野良猫を捕獲する理由はなんですか」

というものです。

坂本：天売島は，海鳥の繁殖地になっていまして，野良猫が海鳥の卵やヒナを捕食してしまうことが問題になっていました。環境に影響与えてしまうことがかなり問題視されるようになりました。私たちが捕獲事業を行う場合は，野良猫が300匹程度いたと言われていて，鳥の数も減ってしまいました。その中で環境省から羽幌町に依頼がありまして，猫を捕獲することになりました。これは猫を殺処分するのではなくて，捕獲した後は，羽幌町や札幌市のNPO団体に預かってもらい，飼い慣らした後に里親に譲渡するという仕組みになっています。猫の譲渡会が札幌や旭川で行われるようになっています。

大貝：3点目ですが，「天売島の海産物による商品開発は，今までにどのようなものを行ってきたのか」という質問です。

坂本：おらが島で取り組んだ事業でよろしいでしょうか。天売島で年中とれる魚介類はタコになります。商品を開発する上で年中とれるタコに注目しました。タコを燻製にして，それをオリーブオイルに浸した瓶詰めをつくりました。商品開発はできたのですが，なんせ1年目の事業だったので，保健所とのやり取りの中で，販売まではいきませんでした。現在では瓶詰めはできないのですが，一次加工までは行って，その後はCBS（総菜屋）さんに渡しています。私たちは，タコを漁協から買って，茹でてカットまではしています。CBSさんの方では，マリネやパエリアなどで使用されて，実際に商品として店頭に並んでいます。

大貝：それから4点目の質問です。「基幹産業である漁業で担い手不足が課題に挙げられていましたが，課題を解消するための具体的な取り組みは，何かありますか」ということです。

坂本：基本的には天売島の人口が増えない限りは，担い手不足の解消はなかなか難しいと思います。漁協さんの方では，漁業に最低3年従事しなければ，漁業権は与えられないというルールがあります。3年間漁を手伝ったとしても，すぐに漁師にはなれません。実際に自分で漁業に本腰を入れて取り組んで，はじめて漁業権が与えられます。今，若者が具体的に何を危惧しているのかといいますと，将来的に自分たちの代になった時に，本当に誰もいなくなってしまって，遠方に行くタラ漁などの大きな漁が出来なくなるのではないか，ということです。その中で，まずは天売高校を存続させて，地域を活性させて人を増やすということです。天売高校には，今では札幌や道外から高校生が来るようになっていますが，そういった人たちを増やしながら，漁師をやりたい人を増やすという取り組みは行っている最中です。

大貝：ありがとうございました。坂本さんに対して質問は，今随分とお答え頂きました。

次の質問ですが，実際にインターンシップに参加した学生に対して，実力試し的な質問を振ってみたいと思います。「天売に若者はどれだけいるのか，実際に島を自転車で1周したという報告があったけども，島の概要はどういうものか，学生一同に答えてほしい」という質問です。

木村（インターン参加学生を代表して）：若い人の人数は，感覚での話ですが，50人くらいでしょうか。若い人というのは年齢でいうと30代くらいまで，でとらえています。若い人はそんなに多くないという印象です。

大貝：子供を含めて，若い人が多くないとい

う状況の中で，具体的に何が問題になっていましたか？

木村：小学校の向いにある，保育園で専属の保育士さんがいない，ということが問題になっていました。

大貝：保育園の問題は，今回帯同した教員のなかでも問題視していて，島のお母さん達から是非この問題を札幌から発信してもらいたい，という要望をもらっています。この点に関しては，今後膨らませていければと考えています。

それから，大学の教員に対して，「なぜ地域インターンシップ先として天売島を選んだのですか」という質問があります。また，「2017 年度には講義として開講する話がありましたが，その際も天売島だけなのか，あるいは毎年違う場所でインターンを行うのか，どういう方向性でしょうか」ということ，そして 3 つ目「事前学習として，どういった事を学生に対して行いましたか」といった質問があがっています。

水野谷：天売島を選んだ理由ですが，浜中さんのスタイルにあったような紹介でした。もともとどこでやるかということに関しては，各教員様々なフィールドを持っていますが，本当にそのフィールドでできるのかわからなかったので，浜中さんとも相談して，まずやってみようということになりました。エンブリッジで受け入れ先を探してもらって，そこで天売島の「おらが島」さんから快い反応があって，天売島に行くことになりました。

2017 年度からの具体的な場所ですが，もちろん天売島で継続することを考えています。今回はトライアルですが，実際にやった後の反応を見て，次年度何をするかを今後詰めていくことになります。坂本さんをはじめとして，天売島の人たちと信頼関係も含めて，関係は深められたと考えています。本当にまだ始まったばかりなので，長期的に，地域研修とは違う形で続けられるやり方を考えていきたいと思います。まだまだ希望的観測の域を出ないのですが，長く続けられていった後には，また別の場所で行うということもあり得るかと思います。事前・事後の学習も含めて，教員も覚悟が必要ですし，体制を作っていくことが求められていると考えています。だからこそ，軽はずみにあっちでもこっちでも，ということにはならないと思います。

事前学習については，人口だとかは産業構成を含めて，羽幌町や天売島の歴史なども，あらかじめ調べていこうとは，大貝先生とも話していました。だけども，今回はそれはやらないという方向にしました。というのも，直接的な表現になりますが，あえてまっさらな状況で島に入って，そこで学生が何を見るのか，また島の人からどういった話を聞きだすか，ということに主眼を置きました。自分の力で得た情報を通じて考えていくということにしました。これがうまくいったのかどうかについては，当然今後の反省材料にしますが，うまくいった側面も多くあるのではないかと考えています。

また，学生のスライドにもあったように，自然と人間の関係があって，まざまざとそれを見せつけられたインターンシップでした。海が荒れて，スケジュールが直前で大幅な変更になりました。本来だと，羊ヶ丘展望台でウニ祭りをやった後に，天売島に行く予定でしたが，その順番が逆になりました。インターンシップの後半に取り組んだウニ祭りでは，海が時化てウニが取れず，散々な結果でした。しかし，それらの経験を通じて学ぶことが多かったと思います。

大貝：水野先生の話に補足しますと，浜中さんのプレゼンにもあったように，もともとこの地域インターンシップをやってみたいと

言ったのは，おそらく私です。それで昨年から，いろんな先生と話をしながら，「勢いがあるうちにやってしまおう」ということになりました。だけども，大学の教員で新たなフィールドを開拓するというのは，なかなか困難です。そこで，「餅は餅屋」ではないですが，浜中さんに相談したということです。地域インターンシップは，本当に地域に入り込んで，地域の人と協力しながら，そして仲間とも協力しながら，地域に「あるもの」を探し，新しい地域の仕組みづくりを行える人材を送り出していきたい，という新たな目的のものです。新しい可能性を持つプログラムがあってもいいのではないかと考えたわけです。

それで，2016 年 1 月に，地域と関わりながら「人づくり」を行っている方たちをお招きして，「いなかビジネス教えちゃる」というシンポジウムを開催しました。そのシンポジウムでも結論としてできたのは，「まずはやってみよう」ということでした。しかし，先程の繰り返しにもなりますが，新たな地域開拓は難しいということで，浜中さんに関わってもらうようにお願いしました。実は最初は，いろいろな候補地を考えていました。検討を重ねる中で，「学生の逃げ道をなくす」ことも重要ではないかという結論に至り，北海道内の島をメインに考えるようになりました。

今後の方向性に関しては，先ほど水野谷先生からもあったように，まずは続けることを考えています。長期的な視点に立てば新たな場所を開拓するということもあり得るかもしれませんが，現状のマンパワーを考えれば，それはなかなか困難です。実際に連れて行ける学生も 20 人以上は難しいと考えています。意識としては小さく始めて大きく育てる，ということになります。

大貝：若干長くなりましたが，他の質問に移りたいと思います。また大学生に話を振ってみよと思います。日常の大学生活に関して，「どういう関心があって，地域経済を学んでいるのか」ということと，「天売島に行って，その関心がどう変わりましたか」という質問です。天売島で何を学びましたか？ということですね。

天野：島に行って実際に学んだのは，１次産業，２次産業，３次産業についてだと思います。漁には出られませんが，漁から帰ってきた船の網から魚を外したり，魚やウニを加工したり，それを販売したりと，一連の流れを体験できたのは，おそらく島だからだと思います。島の生活は天候に左右されることの多い，ということも含めてです。オフィスの中で働いているだけの人にはわからないことだと思います。

谷口：地域経済に関する授業については，大学でいろいろと受講しています。座学で学びながら，地域に飛び込んでいって，この場所で自分たちに何ができるのか，を考えていくことは，とても大変でした。だけど，実践できるという事はすごくよかったと考えています。大きな学びにつながりました。

木村：地域の中で，特に今回は島だったので人口はあまり多くないのですが，多くないということは，逆に言えば，「関わりやすい」「つながりやすい」ということになるのかなと思いました。地域経済にとって大切な事は，「つながり」であると考えています。経済という話ではないかもしれませんが，このつながりを基にして，地域を良くしていくことはできるのではないかと思います。顔が見える空間で，お互いが支え合っているということも，よく見えました。

白幡：私は島に行って，ウニの殻剥きの仕事が多かったし，ペンキ塗りで行った先の佐藤

さんは漁師で，マグロを獲ってきたりもして，そのお手伝いもしました。普段魚は，スーパーでパックに入れられて並んでいるのを買う程度のものでしたが，実際に漁師さんが獲ってきたものを加工して販売するまでのお手伝いの中で，魚が私たちの食卓に並ぶまでの流れが良く解りました。日常の生活では，まず関わることがないのですが，今回のインターンシップで，ほんの少しですが経験することができたのは新鮮でした。

大貝：意外と，川上から川下までの流れ（魚を獲ってくる，加工する，消費地にもっていく，販売する，消費するという流れ）は，わからないんですよね。それが当たり前になってしまっている。今回彼らは，ウニを通じてこの流れを経験しています。海が時化てウニが取れない。しかし，販売する場所では「ウニ丼ができない」と分かった時に，お客さんはみんな帰っていく。日常では，物流網も発達しているので，自分が欲しいと思ったものは，お金があれば手に入る。みんなそう思っています。ですけど，自然を相手にしたときには，これはなかなか難しい。天候に左右されることが非常に大きいと思います。今回こういった事を経験できた学生は，非常に羨ましいと感じています。

大貝：次の質問ですが，これも学生に対してですね。「島を良くしていきたいと言っていたが，島に行く前と後とでは，島の生活や現状に対して見方は変わりましたか」，ということと，「今後に向けて島にはどのような課題があると考えていますか」という質問です。それからもう一つは，「交流会では島の人とどのような話をしたのか，そこから何か感じることあったか」という質問です。

松原：正直に言って，行く前までは，天売島の存在すらしりませんでした。地図で調べて，天売島がどこにあるのかを知って，その隣に焼尻島があって，そこに「おらが島」の坂本さんと聞いて，すべてがごっちゃになっていました。それ以外に先生たちからの情報はありませんでした。また 5 日目に交流会をやるということだったのですが，周りの大人がやってくれるものと思っていました。だけどそうでもありませんでした。やるのかやらないのかといったところから自分たちで考えなければいけませんでした。とにかく，島に行ってからの情報量が多すぎて大変でした。日常の生活で感じたのは，札幌での生活と天売島での生活の違いです。

谷口：まず行く前と行った後の話をします。行く前は，島の人口が少ないので，コミュニティもある程度決まっていて，ましてやインターンの受け入れ体制は話できていないのではないかと考えていました。だけど 1 週間島で仕事しながら過ごす中で，「また来てね」と言ってくれる人が多くて，外からの受け入れに対して寛容だなという印象受けました。仕事もいろいろしましたが，観光案内所で仕事をしたときには，仕事の内容を島の高校生に教えてもらいました。今高校は天売島内外から高校生を受け入れていますが，高校卒業したら何をしたいのかと聞いたところ，とりあえず島を出たいという返事がありました。おらが島活性化会議のメンバーは U ターン者が多いと聞いていました。そのこともあって，高校生に対して，島を出た後は外でいろいろ経験して，その後，天売島に戻ってくるのかと尋ねてみると，今はそこまで考えていないということでした。ある程度時間がたってから U ターンをしてくる人が多いのかと思ったので，この高校生等を，どう U ターンさせるのか，U ターンする気にさせるのかが課題であると思います。あわせて，U ターン希望者に対して受け皿を用意することも，課題の 1 つであると思います。

木村：島に行くまでは，時間がゆっくり流れているイメージがありましたが，実際に行ってみても，そのイメージのままでした。落ち着いて生活することができました。島の人も魅力はスローライフと言っていました。島の課題としては，島にいる若い人たちが島に対してどれだけ愛着を持っているか，島のことを本気で考えているかという事だと思います。この点に関しては，１週間の生活の中で，かなり温度差を感じました。まずは島の人が島のことをもっと好きになることから始めることが必要だと思います。

天野：島に行く前は，ただ自分が成長できるのではないか，と考えていました。実際に過ごしてみて，島の人と一緒に仕事することで，島の人がいろんな思いを持っていることが分かりました。関わってくれる人たちに何かできることはないかと考えるようになりました。

今後は，新たにインターンシップに参加する人たちを巻き込んで，新しい取り組みをしてみたいと思います。

白幡：私も天売島に行く前は，島の位置すらわかりませんでした。そして，谷口が言うように，元々のコミュニティに入ることは難しいかなと考えていましたが，島の人たちはとても温かかったです。仲良くなったおばちゃんに，最近肉を食べてないと言ったら，から揚げを作ってきてくれました。交流会のときには，次来るときには私の家に泊めてあげるという言葉ももらいました。

政策的な話に関しては，天売島フェアで，羊ヶ丘展望台に行った時のことです。観光客に対して，天売島の紹介をしていたのですが，たまたま来ていたハッピに天売島の地図が描かれていました。それを見せながら，話を膨らませました。とにかく天売島知っている人がいませんでした。やはり，まずは情報発信から始めることが必要だと思います。

大貝：今も学生から出てきたコメントにもあるように，島の人たちの，島に対する認識が低いというのが如実に出ているのかなと思いました。例えば木村くんが言っていたように，島の人達の中で，島のことを考えている人たちがどれだけいるのだろうか，ということですが，重要な論点だと思います。学生と地域に入っていくことが多いのですが，地域の人が地域のことを分かっていないケースは多いです。それが当たり前だと思っているんですね。だからこそ第三者目線で，外からの刺激が必要というか，「その地域の何に反応するのか」というのを，意図的に見せていく必要があるのではないかと考えています。そこで生まれた新たな気づきを共有していく，それを育てていくことが重要になるのではないか。だからこそ，学生を送り込むときに，あえて事前に情報を与えなかった，ということですし，学生と現地の人とで協働する関係を創り出すことが大切だと思います。やってもらう，やってあげるという関係ではなく，ですね。

そろそろ抽象度を上げたディスカッションに移っていきたいと思います。「地域インターンシップに実際に関わって，４者それぞれがどのような魅力，可能性，課題を感じたのか，あるいは認識したのか」という質問が出ています。

浜中：道内の大学を見ても，今回のような取り組みはまだまだ多くはありません。論点はいろいろあるのですが，まず教育的効果の観点から話したいと思います。今回は良くも悪くも，大貝先生と事前に打ち合わせする中で，大人がいろいろとお膳立てをして，学生を迎え入れるという構図はやめようということになりました。基本的には，我々は必要最低限，生命の危機，安全に関するところは念入りに調整しました。なので，学生からすれば，「騙された感」が非常に多かったのではないかと思います。「自己効力感」と教育分野で

は言ったりするのですが，小さな経験を積みながら，「やればきっとできる」という感覚を持つことがとても大事だと考えています。そういう意味では，島でのイベントなど，学生たちは「できるわけないだろう」と思っていたことが，知恵を出し合ったり，協力を仰ぎながらしてできてしまったわけです。課題が目の前にあったときに，逃げるのではなく真正面から取り組むと，その課題をクリア出来ると思うようになったのではないかと思います。この点で，教育的効果は非常に高いのではないかと考えています。

次に，外からの視点が入ることは大事だということを，大貝先生が言っていましたが，１週間見させていただいて思ったことです。観光客の人たちは，外の目線を持って島にはやってきますが，その人たちが滞在中に関わるのは，観光に関連するお仕事をしている人たちだけなんですね。島民の方達からすると，観光で潤っているかもしれないけども，何かよくわからないというところなのです。そういう意味では，学生たちは観光で島に入っていたわけではなくて，島の人たちとも接する機会がたくさんあって，「外からの目」を島の人たちが感じやすい，そういう時間になったのではないかと思います。「外からの目」に触れる機会が多くなることは，今後もっと重要になっていくのではないかと思います。

あとは，今回関わった学生が，卒業後，就職したあとに，どういう形で島と関わり続けていくのか，といったことも今後の可能性として挙げられるのではないでしょうか。

大貝：イベントごとに対しては，細かいことは学生に一切伝えませんでしたからね。「そんなことは聞いていない」という意見もあったようですが，私にしてみれば，「聞こうとしない，確認しない方に問題がある」というスタンスでした。学生を混乱させたかもしれませんが，重要な学びがあったのではないかと思いますけども。

次に，坂本さんにも同じ質問に対するご意見を伺ってみたいと思います。それと，もう一つ，浜中君のプレゼンの中で，「お互い win-win になるインターン」が望ましいとありましたが，天売島の人たちにとって，得るものはあったでしょうか，という質問にも答えていただければと思います。

坂本：まず，このインターンシップの話があったときに，はっきり言ってインターンシップがどういうものかもわからずに，ただ大学生が来るということで，ゼミや旅行，ボランティア活動とも少し異なるな，というところがありました。だけど，島に人が来るということであるならば呼び込もうというのが私の独断と偏見で決めました。次におらが島のメンバーに報告しました。おらが島は職員３名雇っているので，基本的には稼がなければなりません。ただ，今回のインターンシップは稼ぐ要素が何もなく，メンバーに相談したらさんざん言われました。島民からも変なものを受け入れているという目で見られました。そのなかで，６人の学生を受け入れて，今回はまず天売島を知ってもらうということを大前提で考えてメンバーにも理解を求めました。先ほどもありましたように，毎年秋におらが島活性化会議では，島民に向けて自分たちの活動を理解してもらうために，感謝祭を行っています。時期も同様の時期でして，今回は学生に集大成として，島民に感謝する意味も込めて行ったらいいのではないかと持ちかけたのは私です。学生側には全く伝わっていなかった，という現状がありましたが，話を進めるなかで，６人で完成させるということになりました。焼き鳥を 800 本売ったと言いますが，仕入れにしてもお金がない，炭はどうするのか，テントやいすはどうするのか，，，そういった中で学生達が自ら考えて，それぞれどうするのかというときにおらが島

のメンバーや若い島民達の協力の下で，お年寄りや子供，そのお母さん方と交流できたこと，実際には200名近い人たちと交流できているのでそれは成果としてみて良いのではないかと考えています。

来年に向けてですが，天売島としては，学生が手伝った各方面に加え，「是非来年はうちも請けたい」という声がかかっていますので，来年も継続して行きたい事業になりますし，やっていきたいと思います。関わり方ですが，おらが島活性化会議は，常に島の課題と向き合って一つずつクリアしていっている最中ですが，そのなかで学生に関わってもらえそうなものをその都度提案する，という形になります。

大貝：ということは，いろいろご迷惑をおかけしていたのですが，漠然と思うのは，おらが島活性化会議の方でも，学生を受け入れるための思惑はあった，ということですよね？

坂本：そうですね。おらが島活性化会議は，何か金儲けをしている，というように見られているところが未だにあります。だからこそ，良いことをしなければならないというのが大前提です。良いことをしながら島の人におらが島を理解してもらうというところがあります。なので，学生の受け入れに関しては，持ちつ持たれつのようなところです。

大貝：今回全く初めてのインターンシップが上手くいったというのは，初めてもの同士のなかでも，それぞれが思惑をもっていた，それが良い重なり合いをしたのかなと思うんですね。受け入れ先になって頂けたのも，地域のことを本気で考えておられるからだと思います。現地で実践されている方々がいて，その方達と関わり合いをもたせていただく中で，お互いが得るものがあればいいなと考えていました。

そろそろ時間も終わりにさしかかっているので，最後の質問にいきたいと思います。学生に対して，「今回のインターンシップを通じて，何を学んだか」というものです。学問的な視点は除いてもらって構いません。１週間の生活を通じて，自分がどう成長したと思うか，答えてください。

白幡：自分が成長できたと思うことは，６人しかいないなかで，交流会の話があって，初日から夜中の２時まで話し合いをしました。私は普段，ゼミでも自分から意見を言う方ではないのですが，自分にどのような役回りができるのか，自分にしかできないことを考えて行動するようになったと思います。あとは，ちょっとキツいかなと思うことに対して，逃げずに挑めるようになったのかなとは思います。

天野：白幡くんと似ていますが，私も，この６人の中で自分には何ができるのだろう，ということは常に考えていました。ほぼすべて自宅から通学している学生で，日常生活でも親に頼りきっているところがあって，料理や洗濯物は自分がやろうかと思ったり，役割を考えて動いていました。札幌に戻ってきてからも，それは継続しています。

木村：私は，相手が本当に何を求めているのかをしっかり考えて，感じ取って，実践するという力が少しは身についたのではないかと思います。というのも，イベントの話になりますが，イベントでは，最初は焼き鳥以前に，魚を使ったものをやろう，浜鍋であったり，海鮮焼きそばであったり，という意見が中心でした。でも，これらの意見は，３日目のおらが島の方々との懇親会で，「本当に島の人たちが求めていることは何なのか」という問いに対して，自分たちの意見を通すことに必死で，それ以外のことに目が向いていなかっ

たことに気づきました。懇親会の場で，アドバイスをもらってからは，この点を学ぶことができたかなと思います。

谷口：当初，天売に行く前は，「サバイバル」だと聞いていました。だけど何がサバイバルなのか全く分かりませんでした。その結果，札幌から非常に多くの食料をもっていくということになりました。札幌にいてサバイバルということを考えたときに，結びつくものを試していたつもりでしたが，実際にいってみて，先生方から特に情報をもらえない中で，自分たちでどのように行動を起こして，自分たちの目で確かめて，自分たちで工夫していくこと，これらが本当の意味でのサバイバルということだったのかなと考えています。6人にとっても，同じゼミのメンバーもいますが，このメンバーで活動できたことが良かったなと思います。来年以降もこのインターンシップは続いていくと思いますが，私たちも天売島の応援隊として，なにがしかの形で関わっていきたいと考えています。

松原：良い響きで言えば，ルームシェアではないですが，6人が同じ宿で1週間生活して，6人で何かをしようとしても，全員がキッチンに立てるわけではない。役割分担が必要で，そういう面で，料理だったり洗濯だったり，プライベートがほぼない中で1週間過ごした経験は，他ではなかなか得られないものかなと思います。男は5人が同じ部屋でしたが，本当に毎日毎日夜中まで交流会の話し合いなどをして，次の日は朝3時からの仕事に寝坊したりもしました。

漁のお手伝いを朝3時からしているときに，網から魚を外す作業ですが，基本的には高齢者の方が多いんですよね。そういうところでお手伝いしたときに，「ありがとう」という言葉をもらったり，別の場所で会ったときに，「やっと今日仕事を休めたよ」といった言葉をもらえたことも嬉しかったですが，過疎，少子化，高齢化といったことを身近に感じ取ることができたことが，行ってよかったなと思うことです。

大貝：2年生なのに，よくここまでいろんなことを考えていたんだなと，聞いていて思いました。最後に，もう一つだけ，参加した学生に対してですが，今後も島と関わりたいという意見がありましたが，次年度以降もカリキュラムとして続ける中で，次の新たな学生と，島とのつなぎ役として何かできそうなことはありますか。坂本さん，浜中さんに対して，大学側は，ほぼ丸投げ状態だったことは反省材料なのですが，今後に向けて，大学側に対して，「こうして欲しい」という要求や改善点はありますか。

松原：このプロジェクトをもっと1年生に対して知ってもらえるような取り組みを学内でできればいいなと考えています。

浜中：来年は，（今回の参加者は）島に来ますか？

松原：ここにいるメンバーは，全員行くと思います。

谷口：私たちは1週間の滞在だったのですが，カリキュラムとしてはもっと長期化したい，ということですよね。長期間になるほど，もっと自分たちから動ける仕組みだったらいいかなと思います。思いついた企画をまずはやってみる，というような，です。

木村：まずは学内，自分の周りから広めていくことを初めていきたいです。そして，自分も来年も行きたいと思っているので，今回できなかったこと，やってみたいと思ったことを実践してみたい，次のメインメンバーに伝

えていきたいです。そういう関わり方をしたいです。

天野：まずは来週の地域研修報告会で，ちゃんと報告しようと思います。１年生も何人か来ると思うので，伝えていきたいと思います。

白幡：前の４人が言ってくれたことがすべてだと思います。

大貝：あと，１つ忘れていました。坂本さんと浜中さんに対して，「今回参加した学生の感性はどうですか？」という質問もあります。

坂本：最初は，初めての経験だったこともありますし，私自身も普段は仕事をしているので，うまく関われたかどうか，というところです。まあ最初に，大貝先生や浜中さんと打合せしたときに，「やるときはガッツリやってくれ」という言葉をもらっていたので，ここぞとばかりで，懇親会のときには怒鳴りつけたりもしました。感性と言うよりも，６人はやりきったという形で島を離れました。今時の若者なのでしょうが，１週間でとても成長したと思います。

今後に関しては，基本的には今年のスタイルで大丈夫だと思いますが，何か島に残るような形のものがあれば良いなと思います。感謝祭もそうですが，商品開発など，残るものにも挑めればと考えています。

浜中：感性，そうですね，最初会ったときには「大丈夫かな」と思うところはありましたが，意外と入り込むことが上手かったように見えます。世渡り上手というかそんな感じでもありますよね。だからこそ，上手くやれるがために，３日目に坂本さんから「なんのためにやるのか」といった本質的なところを突かれたのではないかと思います。それでようやくギアが入ったのかなという印象です。ギアが入れば変わるんだなと。大学への要望ですが，一つは，感謝しているところでもあるのですが，私たちが大学からの依頼で仕事をするときに，すべて丸投げのケースって多いんですよ。今回のプロジェクトでは，先生方と一緒に創らせていただきましたし，先生方みんな天売島にも行っていますし，そういうコミットの仕方を今後も継続できればと思います。また，難しいことではあるのですが，天売島のハイシーズンは６月中旬から７月なんですよね。大学スケジュールの可能な時期と，天売島で要望が強い時期がズレているのですが，この点をいかにして調整していくか，ということは考えて行く必要があるように思いました。

大貝：まだお答えできていない質問もあるのですが，時間になってしまいましたのでお答えできていない分に関してはご容赦ください。最後まとめになりますが，坂本さんからは今後も継続していきながら，是非島に残るものもやっていきたいといったことや，浜中さんからは大学カリキュラムだけども，実際にいつ行うのが望ましいのか，といった問題提起を頂きました。仕組みに関してはこれからも議論しながら作り込むことが必要だとも感じています。継続的に，やる気のある学生，興味がある学生で，お世話になりながら，みんなで何かを創り上げていくようなものにして行きたいと思います。今日はお忙しい中，どうもありがとうございました。